

東北大学大学院医学系研究科の安田聡教授、課部長兼准教授らの研究グループは、多施設横断研究により成人先天性心疾患患者の健康関連QOLと、その低下に関連する因子を明らかにしたと発表した。東北大学病院および国内複数の成人先天性心疾患診療センターの患者の臨床データを解析することでわかった。健康関連QOLは若年世代で特に低下し、この低下に未就労状態や小児期の体育などへの参加制限、喫煙などの因子が関連することがわかった。介入プログラムの開発につながる成果と期待される。成果は「Circulation (Advanced)」9月5日号に掲載された。

# 成人先天性心疾患患者 健康関連QOLの低下 若年世代が目立つ

的に制約がかかることも多く、心理的社会的困難を引き起こすためケアや健康関連QOL向上のための支援の必要性に注目が集まってきている。2017年に報告されたアフリカ大陸以外の4大陸の日本を含む15カ国で成人先天性心疾患患者の健康関連QOLを比較した研究では、日本が最も低いことが明らかになった。一方で、他の先行研究は、比較的小規模でこの向上につながるような結果は出ていなかった。

そこで今回研究グループは、健康関連QOLと関連する因子を明らかにすることを旨とし、東北大学病院を代表機関として国内の3つの成人先天性心疾患診療センターとの合計4施設のデータベースを利用して、多施設共同横断研究を行った。健康関連QOL評価に国際標準のSF-36を用い、1,025人の成人先天性心疾患患者(平均34歳、女性54%)について「身体的健康度」と「精神的健康度」のスコアを算出。これらと臨床因子、社会・生活環境因子との関連を、

## 未就労状態や喫煙など関連 東北大が解明

線形回帰分析を用いて検討した。さらには成人先天性心疾患患者の健康関連QOLを一般人口(国民標準値)と比較した。SF-36は36項目の質問で構成され、特定の疾患によらない包括的な健康概念を8領域で測定することで、「身体的健康度」と「精神的健康度」のスコアを算出できる。

その結果、成人先天性心疾患患者の健康QOLは一般人口と比較して有意に低下。特に若年世代でその低下は顕著だった。臨床的および社会的環境要因で調整した後も、身体的健康度の低下は未就労状態、小児期の体育や運動部への参加制限と関連することがわかった。精神的健康度の低下には喫煙、増加する家族人数が多いことなどが関連していた。

今回明らかになった関連因子は、健康関連QOLの低下を向上するための介入プログラムや支援策の標的として利用できる可能性がある。将来的には小児患者への介入プログラム開発を目指すという。

安田教授の話「小児患者への介入研究は結果が得られるまでに10年程度を要するのが難点です。今後は成人先天性心疾患の予後(心血管合併症の発生)と健康関連QOLの関係について調査したいと考えています。また成年期であっても運動などへの積極的な参加によりQOLが改善するのか、さらには予後の改善にもつながるのか、今後の研究課題と考えています」

小児期に発症する先天性心疾患の治療成績向上に伴い、成人期に達する同疾患患者数は世界中に増加している。慢性心疾患の状態は重症度にもよるが日常